

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:19.

放射性ヨード内用療法を受ける患者のからだ・気持ちの状況と対処行動
および看護への要望

及川 真理奈, 眞岸 優, 松澤 絵里奈, 吉本 早希

放射性ヨード内用療法を受ける患者のからだ・気持ちの状況と 対処行動および看護への要望

旭川医科大学病院 10階東ナースステーション
○及川真理奈 眞岸優 松澤絵里奈 吉本早希

【目的】RI治療を受ける患者は、治療により様々な身体的・精神的症状を訴えることが多い。しかし、RI病室入室中は放射線被曝の観点から外部との関わりを制限され、大半の時間を一人で過ごすことになるため、RI病室入室中に出現すると思われる症状や出現した症状に対して、患者自身で対処行動をとることが非常に重要であると考えます。そこで、本研究ではRI治療を経験した患者から、訴えの多かった症状に対する具体的な対処行動を明らかにすることを目的とした。

【方法】甲状腺腫瘍にてRI治療を経験した患者81名に対して、独自に作成した選択形式と自由記載の調査票を郵送した。質問項目ごとに単純集計を行い、自由記載欄から対処行動の内容を抽出した。

【倫理的配慮】調査票は無記名とし、返送をもって同意とみなした。また、本研究は研究者の所属する施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】回収率は53%（42名）であった。吐き気・食欲低下は66%に認め、対処行動として食事形態の変更や摂取方法の工夫、安静臥床が行われていたが、当病棟で行っている食事前のナースコールでのメニュー紹介は、対処行動をとる上で重要な働きかけとなっていた。臭気は33%に認め、対処行動として食事を片づける際はマスクを着用する、食事形態の変更が挙げられた。味覚の変化は45%に認め、対処行動として酸味のあるものを摂取する、唾液腺マッサージが挙げられた。寂しさ・孤独は45%、抑うつは54%に認め、対処行動としてTV鑑賞、CDを聞くなどの娯楽が挙げられた。環境に対して満足ではない患者は50%と多く、特に23%の患者が寒さを訴えていた。寒さへの対処行動として、予め着る枚数を増やした患者もいた。

【結語】本研究で挙げた症状のうち患者が自覚した症状として多いのは、吐き気や食欲低下が最も多く、次に抑うつ、寂しさ・孤独、味覚の変化が挙げられた。吐き気や食欲低下は、食事形態の変更や摂取方法の工夫、安静臥床をすることで効果が得られている患者が多かった。寂しさ・孤独に対して娯楽や気晴らしとなるような活動をしている患者が多く、今後もRI病室の環境がさらに良くなるように整えていく。

今回の研究ではRI患者の症状に対する対処行動を把握できたため、今後はその対処行動の情報をもとに私たちが患者にできる介入方法を検討していきたい。

引用・参考文献

- 1) 森本悦子,佐藤禮子.放射線療法を受けるがん患者の構えに関する研究.日本がん看護学会誌.14(1),45-52,2000.
- 2) 川名典子.がん患者のメンタルケア.南江堂.2014.
- 3) 大塚麗奈,佐川雄太,田中静香他.放射性ヨード内用療法を受ける患者の心理的・身体的状態の検討.旭川医科大学病院看護研究集録.平成21・22年度,44-45,2012.
- 4) 福澤知美,上村圭子,宮崎富士子.ヨード内服治療により放射線管理区域に隔離入院した患者の入院生活の受け止め－治療後の患者への面接調査からの分析－.埼玉県立がんセンター看護部看護研究集録.34,9-12,2010.